平成　27 年　3 月 16 日

平成26年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 （該当に〇）	海外共同　・　共同研究　・　個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	植木武 生活科学科・教授	
研究課題名	いじめ問題にみる日・米・中国際比較	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
植木 武	生活科学科・教授	統括、アンケート作成・配布・回収・分析
石橋 義永	生活科学科・非常勤講師	アンケート作成・配布・回収・分析
吉野 諒三	統計数理研究所・教授	アンケート作成・配布・回収・分析
ジュリア・トークオティ	ネブラスカ大学・准教授	アンケート作成・配布・回収・分析
ロイ・タマシロ	ウェブスター大学・教授	アンケート作成・配布・回収・分析
ロバート・エドモンドソン	ハワイ大学ホノルルコミュニティーカレッジ・准教授	アンケート作成・配布・回収・分析
張 正軍	寧波大学・教授	
研究期間	平成２６年４月１日　～　平成２７年３月３１日	

海外共同研究を実施することになった経緯（海外共同のみ）

日本においていじめで自殺してしまう事件が続き、なぜいじめが起こるのか、なぜ死に至るのか、外国にはいじめがあるのだろうか等、考えた。そこで、日本とアメリカの大学生を対象に、小～高校までのいじめられる／いじめる経験の調査を準備した。これが第１次調査の２ヵ国比較である。今回の２次調査は、ある中国人が、中国にはいじめは無いと言った。その理由は、教師の権威が強いので、いじめが起こらないのだ、と言う。本当かなと疑問を持ちつつ、第２次調査は、日本・アメリカ・中国の３ヵ国比較を行った。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

植木・山森・石橋・E. Wethington・Q. Wang・R. Edomondson

2009 「家族の絆といじめ問題―日米比較調査―」第 82 回日本社会学会大会報告要旨集. pp. 122.

2010 『シンポジウム　日米国際比較による家族の絆といじめ問題』1-68 頁（日・英両語）.

2011 「日米国際比較にみる家族への絆―大学生から見た家族への思い」共立女子大学総合文化研究所紀要 17： 101-140.

植木・石橋・吉野・J. トークオティ・R. タマシロ・R. エドモンドソン・張 正軍

2011 「日米国際比較にみるいじめ問題」統計数理研究所共同利用実施報告書平成 22 年度. pp.133, 134.

2012 「日米中国際比較にみるいじめ問題」統計数理研究所共同利用実施報告書平成 23 年度. pp.143-147.

2014 「日・米・中におけるいじめ比較―自由書き集計―」日本行動計量学会第 42 回大会抄録集. pp. 212-215.

研究実績の概要（１）

第２次調査の現在までの分析は、単純集計が終了したところで、あとはX^2検定と多変量解析を残すのみとなった。三ヵ国の集計分析から、特に面白いと思った結果を報告しよう。

一番ひどいいじめをされた時期を聞いた。日本は小学高学年（４～６年）と中学が多かった。アメリカは小学低学年（１～３年）と小学高学年と中学時代が多かった。これに対して中国は、小学低学年が最も多く、小学高学年と中学は少し多かった。

どのようないじめを受けたか聞くと、日本は仲間外れが圧倒的に多く、次は誹謗中傷であった。アメリカは誹謗中傷と身体的暴力であった。中国は身体的暴力が多く、次は仲間外れと言葉の脅しであった。

誰にいじめられたかを聞くと、３ヵ国共通して、断突に級友が多かった。

いじめてきた相手の性別であるが、３ヵ国とも同性が圧倒的に多かったのだが、中国は、特に女性に限って男性からいじめられたというのが少し多かった。

いじめられてどう思ったかの回答は４択あり、「死にたい」「非常に辛い」「辛い」「辛くなかった」であった。３ヵ国とも「辛い」が最多であったが、われわれが特に注目したのは、「死にたい」と「非常に辛い」であった。

前問で、「死にたく思った」と答えた学生のみに、なぜ死にたく思ったか質問してみたが、この問は、複数回答が可能であった。われわれは、特に日本人学生の回答に興味があった。日本人学生の回答は、必要とされていないと思ったから、という回答が最多で、次が非常に辛かったからであり、次は自分が死ねば相手が責任を問われると思ったから、という順であった。

最悪のいじめを受けた際、誰に相談したか聞いた。３ヵ国とも相談しないが男女とも３～５割で最多であった。次が親／両親であったが、不思議なのは先生が３ヵ国とも３～11％と少ないことであった。先生に相談すると、相手がチクられたと思い、いじめが更にひどくなることを恐れたのであろうか。

いじめられた後の相手との関係を聞くと、日本は和解したというのが最多で、中国、アメリカの順になった。口を利いていないという回答が最多であったのはアメリカで、次が中国、日本の順であった。日本の和解は、先生が中間に立っていることが想像できる。

「いじめたことがあるか」という質問では、アメリカと中国は30.4～39.2％ぐらいの高い割合を示したが、日本は23～29％という低い割合であった。

最悪のいじめをした種類であるが、日本では「仲間外れ」と「身体的暴力」が多かった。

一番ひどいいじめをした時期では、日本は小学校上級生と中学時代で、アメリカは小学上級生、中学時代、高校時代で、中国は小学下級生、上級生、中学校であった。

誰をいじめたかは、３ヵ国とも共通して圧倒的に級友であった。

いじめた相手の性であるが、３ヵ国とも同性が断突に多かった。

いじめをしたことに関して、現在どう思っているか聞くと、最も反省しているのが日本で、最も反省が少ないのが中国で、アメリカはその中間であった。

研究実績の概要（２）
いじめた時の自分の気持ちを聞くと、日本はふざけといじめの半々が非常に多かったが、アメリカと中国は、ふざける気持ちと半々が多かった。